

調査員調査における実施プロセス情報の活用

前田 忠彦 データ科学研究系 准教授

【報告の概要】

面接法などの調査員が介在する調査では、調査員が対象者から取得する回答だけではなく、完了者と調査不能者の双方について記録することが可能な変数、例えば対象世帯の住居に関する情報や、調査員自身の活動記録など、実施プロセスに関わるデータ(パラデータと呼ばれることがある)も、分析対象とすることが可能である。本報告では、近年の統計数理研究所による訪問調査(第13次日本人の国民性調査等)を題材として、実施プロセスデータの中でも訪問記録から引き出している情報について、実例とともに考察する。

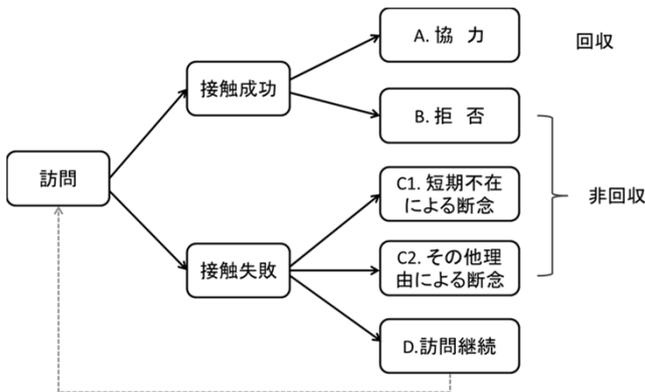
【分析の背景と目的】

統計数理研究所による国民性調査および関連調査でも、近年は面接法の場合50%程度の回収率にとどまることが多い。そのような状況下にあつて、回収率向上や調査不能バイアスの検討に資するべく、次の二つの側面の検討を行うことに意義がある。

- A) 調査員の行動分析: 調査員の行動は、回収率に影響する要因のうち調査主体が積極的に介入することが可能な要素であり、その部分の研究が求められる。
- B) 協力者の回答との関連の検討: 回収に要した訪問回数は、項目内容によっては対象者の回答とも関連する。

【A. 調査員の行動分析】

【分析の枠組み】: 保田(2008)の研究を若干改訂・利用する。



検討指標

$$\begin{aligned} \text{接触成功率} &= (A+B)/(A+B+C1+C2+D) \\ \text{協力獲得率 (説得の技量を反映?)} &= A/(A+B) \\ \text{訪問継続率 (調査員の粘り強さ?)} &= D/(C1+C2+D) \\ \text{断念率} &= C1またはC2/(C1+C2+D) \end{aligned}$$

ここでは第13次国民性調査(KS13)の結果のみ紹介する。

【いくつかの結果】

- 対象世帯の住居形態なども合わせて分析し次の様な発見:
 - 訪問回によって、「接触成功率」が(意外と?)減っていかない、他方...
 - 協力獲得率が、ある時期(訪問回では4回目以降、実時間では、4週目週末以降くらい)から逡減傾向になる。
 - オートロック集合住宅においては、協力獲得率が極端に下がるわけではない、むしろ1回遅れくらいで、通常の集合住宅に追いつく状態になる。

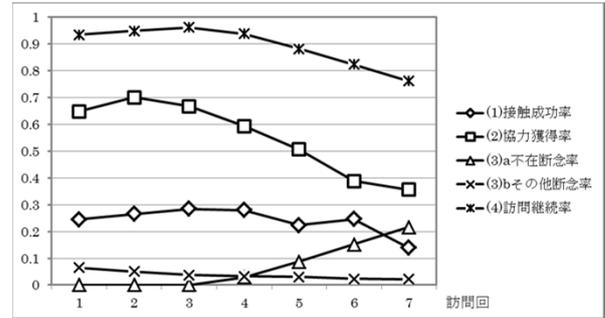


図1 7回目までの訪問に伴う各指標の変化(KS13)

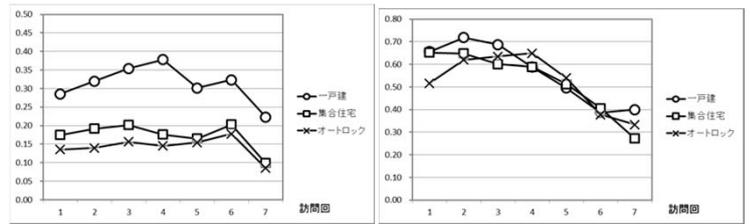


図2 住居形態別の接触成功率(左)と協力獲得率(右)の推移

【B. 協力者の回答との関連の検討】

訪問回数の分布(5回以上をまとめる)は表1の通り。

表1 訪問回数の分布

回数	K型		M型	
	度数	%	度数	%
1回	508	31.9	509	32.2
2回	405	25.5	436	27.6
3回	317	19.9	280	17.7
4回	183	11.5	177	11.2
5回以上	178	11.2	177	11.2
合計	1591	100.0	1579	100.0

5回以上をまとめて2種類の調査票(K型, M型)毎に、協力に要した訪問回数と回答者の回答の連関を見る(表2)。

表2. 訪問回数との連関が有意な項目数(調査票種類別)

検定結果	K		M	
	質問項目	属性項目	質問項目	属性項目
1: N.S.	67	5	54	6
2: p<0.05	2	3	7	5
3: p<0.01	1	10	4	7
計	70	18	65	18

属性項目は概して訪問回数と連関しやすく、例えば勤務形態(#1.4d*)はその典型である。属性項目は両調査票で共通であるが、概ね同じ項目が有意になった。

M型調査票から、連関が強くなった項目(カテゴリ)の集計例2つを表3に挙げる(交通事故に対する不安がある; 若いときは将来に備えるべき)。1回目から5回目にかけて、ほぼ単調に変化しており、訪問回と年齢の間の連関で説明されるようである。

表3. 訪問回数との連関が強かったカテゴリの例(M型)

	訪問回数					全体
	1回	2回	3回	4回	5回以上	
#2.30d 交通事故の不安を“感じる”	59.7%	56.7%	54.6%	48.6%	49.2%	55.5%
#2.13 若いときは楽しむより“将来に備えよ”	70.1%	65.6%	64.3%	62.7%	53.1%	65.1%